# 中日両国の友好関係促進に関する歴史的研究

宋　　国　治

中日両国は一衣帯水の隣国どうしであり，その往来の歴史は古く，文字による記録でも二千余年にわたっている。その間における政治面での，また科学文化面での両国の往来と交流はとても密接で，変化に富んだものであり，その友好と相互学習を通して，両国の経済発展と社会進歩が推進されてきた。「相師とし相学び，倍親しむ」中国の現代文学者で詩人でもある郭沫若氏のこの詩句は二千余年の中日関係を如実にまとめあげている。

歴史を振り返ることは中日両国の関係と発展を探る上で大きな意義があるだけでなく，両国の友好的な未来の構築にもつながるものと思う。

## 一：徐福と中日航路

中日両国の歴史家が考証した大量の史料は徐福が二千二百年前に中国の山東半島から日本を目指し船出したその航路が後に遣隋使や遣唐使が往復した航路に当たるということを裏付けている。中日交流史の序幕に登場し，中日航路を開いたのが徐福である。(1)

中国漢代の歴史学者司馬遷の史記によると次のように書かれている。「斉人徐市（徐福のこと）等上書して言う。海中に三神山あり，名付けて蓬萊，方丈，瀛州と曰う。仙人これに進まう，願わくば斎戒して童男童女とともに之を求めん。ここに徐市をして童男童女数千人を発し海に入りて仙人を求めしむ。」

紀元前二一九年中国秦の始皇帝は中国の東部地方を巡視して斉郡の黄県（現在山東省竜口市）に至り，同県の萊山で月祭りの儀式を行った。そのとき当地の有名な方士（仙術，航海を行う人）の徐福が萊山の麓に設けられた行宮に行って，秦の始皇帝に次のように奏上した。

「臣が聞くところでは東海に蓬萊，方丈，瀛州の三つの神山があり，そこに住む鳥はことごとく白色で，宮殿は黄金，白銀で造られ仙人が住んでいる。島には万年茸やいろいろな仙草が生え，それを食べた人間は不老長寿とのことです。陛下が永遠に偉大な王者でありつづけることをお祈りしますが，そのために，三神山に行って不老長寿の薬を求めて陛下に献上したいのです。どうぞ，お許しください」。始皇帝から直ちに許可が下りました。

こうして故郷を後にした徐福は黄県故城の東門をたって長い船旅の末に瀛州という島にたどりついた。瀛州つまり日本である。ずっとのちに黄県の人びとは彼の壮挙を記念して「東門」を「登瀛門」と呼ぶようになった。登瀛門の遺跡は現在黄県町の中心東市場南端の十字路にある。

〔日本での徐福の足跡と伝説〕

山東半島を出帆した徐福の船団はまず北東の廟島群島に向かった。それから北上して遼東半島に渡り，海岸線沿いに東へ進んで朝鮮に達したところで南へ向きを変え，壹岐対馬を経て日本の九州に到着する。このあとは瀬戸内海を通って紀州の熊野浦で上陸したのではないかと思われる。

これを裏付けるのが現在和歌山県に残っている徐福の墓と徐福を祭る佐賀県の金立山神社である。日本の「和歌山史跡名所誌」と「日本名勝誌」には，いずれも熊野浦に徐福の墓があり墓碑には「秦徐福之墓」という五文字が刻まれているとある。

もう一つ，日本の歴史学者木宮泰彦氏が書いた「日中文化交流史」の中に次のようなおもしろい話がある。

一三七六年詩作に長じた日本の禅僧絶海中津は明の太祖朱元璋に招かれて，熊野の古祠のことを聞かれた時，次のような即興詩で答えた。

熊野峰前徐福祠，満山薬草雨余肥；

只今海上波涛穏，万里好風須早帰。

(熊野峰の前の徐福祠のあたりは豊かな雨のおかげで，一面に薬草が茂っております。今，海は波も穏やかで，風もよいから早く国へ帰るべきです。)

明の太祖も即ちに詩をつくって，それに和した。

熊野峰前血食祠，松根琥珀亦応肥；
昔日徐福求仙薬，真到如今更不帰。
（熊野峰の前の祠が血食（いけにえの血を供えて祭ること）祠であるなら，松根琥珀もよく育つはずである。昔仙薬を求めて行った徐福はいまだに帰って来ていない。）

この話は当時すでに熊野には徐福の墓と徐福祠があったことを物語っており，この二つの詩を刻んだ詩碑も徐福の墓の近くに立っている。

そのほか愛知，山梨，青森，広島，東京などにも徐福に関した遺跡と伝説が残っている。

徐福の功績が中日友好交流の序幕を開けただけでなく，日本に先進的な稲の栽培技術と養蚕技術も伝えた。これが当時の狩猟経済から農耕経済へ飛躍を遂げるきっかけになったと日本の多くの学者は見ている。[1]

## 二：国交の開始，使者の頻繁な往来

西漢時代に中国と日本の間には往来があり，東漢時代の初めには正式の国交が始まった。西暦五七年，日本の使者が東漢の都洛陽に至り，光武帝から日本国王宛に金印を賜わった。三国時代にも日本は「魏」と正式の国交をもち，中国の「魏志」によると，日本の使者が魏国を四度，魏の使者が日本を二度それぞれ来訪しており，南北朝時代に，その使者派遣回数が増えた。隋朝が中国を統一すると両国の関係はそれまでを凌ぐほど密接になり，六〇〇年から六一四年の間に両国の使者の往来は五回に及び，その結果，隋朝文化が日本に伝播し，日本社会の各方面に影響を与えた。

唐朝が樹立されると，中国の封建的経済と文化は全盛期を迎えた。進取の精神に富んだ日本の新興貴族層は唐の完備されたさまざまな制度と発展した経済文化に羨望の念を禁じえなかった。両国の社会発展とさらに深まりを見せた親善友好政策によって往来が頻繁になり，日本が大規模に唐朝から漢文化を取り入れていくなかで，中日関係史上に燦然と輝く一ページが書き加えられるのである。[2]

西暦六三〇年（唐太宗貞観四年，日本舒明二年）から八九四年（唐昭宗朝寧元年，日本宇多天皇寛平六年）までの二百六十四年間は両国の使

者の往来が最も頻繁になった時期である。歴史上の文献では，唐時代を通して日本が正式・非正式に派遣した各種の使者は合計二十五回にものぼり，唐朝が前後十回の遣日使を派遣している。

唐と日本の往来において双方はとても友好的な態度をとり，唐朝は訪唐した日本の使者に対し心からの接待でもてなし，日本側の学問上，任務上の要求を可能な限り満足させている。たとえば七〇二年則天武后は自ら麟徳殿で宴を張り使者を招いていた。また，唐朝の官員も中日両国の友好をとても尊重していたのである。

日本側も派遣する使者を十分に重視し，「大使，副使の多くは文章博士，文章得業生，文章生で，ほとんどが好学の士である。また容貌，風采，動作，態度なども詮衡の条件にしていたようである」。遣唐使選抜後は天皇がすぐに接見し，一カ月後には宮中で副使以上の官員に辞令を発し，水手以上の人員にはその賦役を免除した。そして，出発前には送別の宴が取り行われ，遣唐使の帰還に際してはその地位も昇進させ，再び反物や絹帛などの物品を賜わって慰労した。海外で不幸にも病死あるいは遭難死した成員に対しても職位を追贈してその霊を慰めた。

一方，唐朝の遣日使が日本に到着した際にも同じく日本朝廷の心ある接待を受けている。例えば，西暦七七八年遣日副使孫興進らが日本到着後，天皇は大宰府に命じて唐使を出迎えさせ，労をねぎらった。翌年には天皇が宮中にて孫興進を歓待した。

唐時代の大部分はちょうど奈良時代と並行する。日本が中国文化を集中的に吸収した時期は七世紀中葉から九世紀末にかけての奈良時代である。

この時期に日本の「古事記」「日本書紀」「風土期」などの歴史書が編纂された。それから七五一年に日本初の漢詩集である「懐風藻[751]」が成立した。またその後「凌雲集[814]，文華秀麗集[818]，経国集[827]」等の漢詩集が編まれた。

両国友好と交流に傑出した貢献をなした人物は数多く輩出した。例えば吉備真備と空海は唐朝で留学を終え，帰朝後内政を担当する重要な人物となった。真備は「孫子兵法」から学んだ知識を兵乱平定に用いて，その軍事才能を発揮した。また，表音文字であるカタカナとひらがなはそれぞれ唐代の楷書と草書から創作したものと伝えられている。

また，両国の交流史で賞賛に値すべき人物は鑑真と阿部仲麻呂であろう。

中国の高僧である鑑真は失明の身をおして六回にも及ぶ東渡を試み，十二年の長きにわたって努力した結果，ついに七五四年に日本に到達した。鑑真一行は唐の大寺院の著名な弟子や西域，南海各地の名僧など四十人余りからなり，これらの卓越した学問僧と芸術家はみな盛唐時代が生みだした逸材であって，日本の仏教芸術発展のためにそれぞれ貢献しその多くは日本で生涯を終えた。鑑真は唐招提寺に葬られた。郭沫若氏は賞揚して次の詩を詠んでいる。「鑑真は盲目にて東海に渡し，一片の真誠太清を照らす。己を捨て人の為に道芸を伝え，東風洋として奈良の城に溢つ」。

そして，日本人の阿部仲麻呂は七一七年に第九回の遣唐使に随行して長安に留学し，漢名を晁衡（朝衡とも）と名のって，太学で〝経学〟と〝諸芸学〟を学んだ。七二一年進士に合格して，唐土の士となった。七三一年破格的に四階級も昇進して左補闕に任命されたのを皮切りに秘書監兼衛尉卿，左散騎常侍，鎮南朝護，安南節度使などの高官を歴任した，中国の詩人李白，王維などとも親交を結んで七七〇年一月（七十三歳）長安で逝去した。

## 三：友好交流から相互貿易へ

宋代には政府間関係が一時中断されたものの，貿易による往来は頻繁の度を加え，貿易額や貿易期間などの規模からみると他のいかなる時代も比べものにならないほどに隆盛を極めた。

だが元朝が捲き起こした日本への二度にわたる侵略戦争によって両国の友好関係は破壊され双方に大きい被害をもたらした。

一三六八年，明王朝が樹立されてから国内的には民生安定と経済の復興をはかり，国際的には各国に使節を派遣，入貢を進めて，友好関係を築き，友好的な誠意を示すために日本を含む十五カ国を永久不侵国とする宣布を出し，安定した国際環境の建設に尽した。さらに国際貿易を発展させるために寧波，明州，広州に市舶司（対外貿易管理所）を設け完全な開放政策を推進した。

一三七〇年（明朝洪武三年）明の通使が日本へ遣わされてから中日間の貿易が始まった。しかし，当時の日本は南北朝に分裂して対立し，政局は混乱を極めていた。そのような情勢の下で失脚した政客，武士（壊走兵），浪人らはこぞって海上に漂い，朝鮮半島や中国沿岸にまで及んで略奪を始めた。それによって明政府の貿易開放政策は縮小を余儀なくされ，友好的であった中日関係の発展も阻止されたものの，明政府のとった勘合貿易は中日関係の主流であり，友好的であると言える。一定の時期に勘合貿易によって明朝は威望を高め，新政権の基盤の強化に努めた。足利幕府は明銭（明の銅銭）を獲得して北朝の支配基盤を固め，商業資本の発達を望んだ。特に一四〇四年から一五四四年までの百四十年間日本は二十回に亘って百余隻の勘合船を中国に送り，また中国もしばしば使者を日本に派遣して往来を続けた。洪武・永楽（明の年号）の二朝だけで合計九回の派遣があり，宣徳年間には一度に五，六百人もの人員を遣わした。さらには正確な統計がとりにくい民間貿易や政治使命と文化の伝播を担った僧侶の往来もあり，こういった貿易と往来が両国の友好と経済発展を促進し，社会の発展をもたらした。

清朝前期つまりアヘン戦争前の清と日本の経済交流は絹と棹銅の交易が行われていた。「棹銅」とは日本が江戸時代に輸出専用とした銅塊のことであり，その形が棹状にできているのでこの名がある。中国ではそれを「洋銅」あるいは「条銅」と呼んだ。清政府は棹銅を購入して貨幣鋳造の原料とした。この棹銅交易は形式的には明代の勘合貿易とは異り，民間の自由貿易に似ていたが実際には清政府の計画と直接の指示の下に行われていたのである。一六八四年以後は清政府が遷海令を解除したことでその交易はさらなる発展をみせた。僅か五年という短期間に（一六八八年まで）長崎に到着した中国貿易船は合計五百二十隻ほどにも達した。一六八八年に長崎に入港した（貿易船に乗っていた）中国人は延べ九千百二十人にものぼっていた。清政府はいったい日本からどれだけの銅を輸入していたのだろうか。日本側の統計資料によると一六八四年から一七〇〇年までの一七年間中国船が長崎港から積み出した棹銅は累計六千九百余万斤（二斤＝一キロ），最低の年で二百余万斤，最高の年で七百余万斤であると言われている。当時の状況下にあって中日交流がかくも驚くほどの規模であった。

棹銅交易の存在によって清政府が貨幣鋳造に十分な原料を供給できたことは貨幣価値を安定させ，ひいては社会経済と政治の安定に重要な役割を果した。また一方で，鎖国状態にあった日本は日本の必要とした中国生糸，絹織物，砂糖，薬材，工芸品及び大量の典籍を続々と運びこみ，このことは日本の社会経済の発展と庶民の物資生活と精神文化に大きな影響を及ぼしたと言えよう。

## 四：不幸な教訓

中日両国の友好交流は両国の社会進歩と経済発展を推進してきた。

ところで不幸な時期もあった。それは前も述べたように元朝支配者が捲き起こした日本への二度にわたる侵略戦争が一つで，もう一つは現代に入って日本軍国主義者が中国侵略を開始したことである。一八九四年に日本は中国を侵略し，甲午戦争（日清戦争）をおこした。旅順占領に際し旅順で一般の居民，婦人子供など六万人もの人を殺害した。その残虐性は言葉でいい表わせないほどであった。そして中国東北地区の特殊権益を握る日本軍国主義者がその利益に満足せず，もっと拡大しようとして，一九三一年に「九一八事変」（満州事変）をおこし，満州傀儡政権をつくり中国の東北を占領した。つづいて移民侵略政策を制定し，中国で移民侵略活動を進めた。さらに中国の華北に侵犯して，一九三七年七月七日蘆溝橋事変を起こして中国全土を占領しようという侵略戦争をすすめた。日本軍は一九三七年一二月南京を占領したのち，十二月十三日から十六日までの三日間に中国の兵士，無辜の市民を含めておびただしい中国人を虐殺した。この「南京大虐殺」では中国人が三十万人以上虐殺された。その残酷さは史上にかつてないことであった。日本軍国主義者は中国を侵略するために非常に残酷な手段をつくした。この侵略戦争によって中国人の死亡数は一千万人に達し，破壊された財産は五百億ドルであって世界を驚かせるほどであった。この軍国主義者がおこした侵略戦争は中国人民だけでなく日本人民にもひどい災難をもたらした。(3)

しかし，二千余年の悠久な時代の流れのなかでは不幸な時期はほんの一瞬であり両国民の友誼という大河の流れはこれによって止まりはしなかった。

## 五：輝かしい未来へ

中華人民共和国誕生後，中日両国人民の長期に亘る努力によって国交が回復され，中日関係も新しい時代に入った。一九七二年中日平和友好条約が結ばれた。条約の締結は両国政府と国民に幅広い友好的な道を拓き，両国間の貿易，科学技術，文化面での交流は過去のいかなる時代とも比べられないほどのものである。あい前後して中国の省，自治区，直轄市やその下の市は日本の都道府県や市と友好姉妹都市提携をして往来が頻繁になり，各分野にわたって交流を行っている。科学文化の面においては互いに留学生を派遣し，国費留学生もいるし，自費留学生もいる。詳しい数字はわからないが大連外国語学院について言えばそこで日本語を勉強して日本に派遣された国費留学生は一九七九年から一九九四年までの間に四千人にも達している。

特に一九七八年から中国が改革開放政策をとって以来，両国の経済関係は著しい発展をみせた。(1)経済貿易方面においては中日両国の貿易額は一九七九年の 11 億ドルから一九九三年には 380 億ドルになって 33 倍増えた。日本は中国の第一の貿易相手国となり，中国は日本にとってアメリカにつぐ第二の貿易相手国となった。(2)中国への投資の面においては一九九〇年まで日本の中国に対する投資累計件数は 859 件に達し，累計金額は 2,822 億ドル，一九七九年と比べて，それぞれ 285 倍と 201 倍増えた。(3)技術転譲においては一九八一年から八六年まで日本は数においても金額においても一位を占め，一九九三年上半期まで中日双方技術貿易額は同期中国対外技術貿易額の 32%を占め，再び第一位になっている。

中日友好関係には輝かしい未来性がある。両国の友好往来は言うまでもなく，経済関係の発展もさらに進むであろう。それは二十余年の中日経済関係の発展に伴って各自の対外戦略の重要な部分になっている。日本は国の経済を発展させるために海外市場を開くことが必要で，中国には市場潜在力があり非常によい相手である。また中国は改革開放政策を堅持し，中日両国経済発展にとって都合のよい体制を提供した。

以上述べたように悠久な歴史を持つ中日両国は互いに学び，切磋琢磨する友好的な関係にあり，またある不幸な時期もあった。この二千余年

の中日関係を回顧する時，われわれに啓示してくるものがある。それは両国の友好的往来と団結協力が保ち守られるなら両国人民を幸福にするが，もしそれができないと不幸や災難をもたらすということである。この歴史の教訓を両国人民は子々孫々にまで銘記しなければならない。従って両国の友好関係と経済，科学技術，文化の交流を強化し，促進することは歴史が両国人民に与えた神聖使命であって義務でもある。中日両国人民はこれからもっと仲良く付き合いつつ自国を築き，アジアと世界平和の為に貢献しなければならない。

**[参考資料]**

（1） 人民中国一九九五年1月号
（2） 中国人のみた中国・日本関係史
編著／中国東北中日関係史研究会
東方出版㈱ 1992年12月10日
（3） 中華的魅力 主編／楊洪範 中国当代世界出版社 1994年11月

# A Historical Study of the Promotion of Friendly Relations Between China and Japan

SONG Guo Zhi

China and Japan are separated from each other only by a narrow strip of water. Looking back over our past history, we remember those eras of friendly exchanges and reflect on the dark periods of unhappy relations. What can be considered necessary to bring a bright future to both countries? Now is the time, I believe, for us to contribute to the promotion of peace in Asia and the rest of the world through efforts to build both of our countries and by maintaining amicable ties between us.